霊○新○の献身
4

霊〇新〇の献身　4

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19720115

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 最霊, 本番無し

最霊です。ですが師匠総受けです。今回は本番は無しです。お好きな方はお付き合いください。

ネタバレ
死ネタ注意ではない……だと……！？（つまりそういうことです）

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

- 霊◯新◯の献身　４

霊〇新〇の献身　４

「霊幻先生、オレ、先生に出会えて良かったよ。初めてオレは、人生に希望ってものがあるんだってことを、知れた気がするんだ」
目に涙を浮かべたヤクザの幹部が、霊幻の手を取って感極まって語り続ける。
「霊幻先生、オレ、誰かの笑顔の為に生きられるかな？」
霊幻は美しく菩薩のように笑って。
「もう、そうできていると思いますよ」
また一つ、蜘蛛の糸を垂らした。

そんな姿を、最上啓示は胡乱な瞳で見ていた。

死刑囚霊幻新隆が奉仕をし、運動をし、風呂に入って、食事をとるのを、最上はただ黙って背後霊として見ている。
何故そんなことをするのか、最上自身にも分からなかった。
最初は真相解明のための義務感であった。
（今は、何なのだろう）
最上は眠った霊幻をじっと見下ろす。
手をかざして、精神世界に入って行った。

相変わらず霊幻自身が強固にプロテクトを掛けている精神世界は、素のままでは鏡の破片が無数に浮かぶ宇宙空間のようで探りようがなかった。
（美しい）
最上は目を細める。
そのひとかけらひとかけらに、霊幻の想いや記憶が隠されている。
キラキラしたそれを、一つずつ眺めている暇は無い。
（死刑執行までもうそんなに時間は無いはずだ）
最上は焦る。このままでは真犯人を野放しにしたまま、事件は霊幻の死と共に闇に葬り去られてしまうだろう。
（記憶を見やすく、整理しなければ）

最上は両手を広げて霊幻新隆の精神世界に干渉する。
ざあああ、と鏡の破片は流れて陳列されて。無数の扉に変わった。
「……よし」
最上は一つの扉の前に立つ。
鍵が無数にかけられたその扉には、『モブ』とドアプレートが掛かっていた。
「……やっぱりだめか」
南京錠に触れて最上はぽつりとこぼす。
それには『愛』と書かれていて。
「この鍵は私には外せない」
最上は諦めて、他の扉を見て回る。
「『芹沢』……ダメだな、この扉も鍵がかけられている」
「『エクボ』……この扉もダメか」
「『森羅万象丸』……この扉なら開くな。これから見てみるか」
ノブに手をかけた瞬間に。
最上は、『最上啓示』とドアプレートのかかった扉を見つけてしまった。
「……」
好奇心に勝てなかった。最上は森羅万象丸のドアノブから手を離し、最上啓示のドアを開けた。

まばゆい光。

「あれは……」

凛々しい青年が、マイクに向かって爽やかな笑顔を浮かべている。
「人として当然のことをしたまでです」
（霊幻新隆の中では、私はこんな風に見えていたのか）
きらびやかな世界で、まるでヒーローのように輝く青年。それが霊幻が知っていた最上啓示であった。
（……いや、確かにこんな時期もあったな）
最上は苦笑する。無知であった過去の自分を見るのは辛かったが、英雄然としたそれが霊幻の印象だと知るとどこか嬉しくもあった。

ふと、目を逸らして、最上は驚愕する。
「あの病院は……！！」
どく、と最上の無いはずの心臓が嫌な動きをした。
それは、最上の母が入院していた病院だった。
何故、霊幻が。いや、何度もテレビで放映されていた、知っていてもおかしくない、と最上は胸を押さえる。
（行ってどうする）
そう思いながらも、最上の足は病院に向かう。
慣れた手順で、受付で記名を済ませて、病室に向かう。
手にはいつの間にか、花束。
（ああ……）
病室の扉を開ければ。
初老の女性が嬉しそうに最上を見て笑った。
「いつもすまないねぇ、啓示」
（違う）
「母さん……」
「今日は大分調子が良いんだよ。花は花瓶に活けておくれ」
最上は涙が流れた。これはあくまで霊幻がイメージする『最上の母親』だ。だからまるで普通の母親のように振る舞うだけのこと。
分かっているのに。
「かあさ……」
「おい最上！お前事務所にまた見舞い品忘れて行ってたぞ！？」
駆け寄ろうとした最上は後ろから掛けられた声に驚く。
「霊幻君……！？」
「あら、いらっしゃい、霊幻さん」
山吹の花色をした髪の青年は笑って小さな箱を掲げる。
「ほら、お母さんの好物の、大判焼きだ」
「……今川焼きな」
「はあ！？コレといえば大判焼きだろ！！」
「このあたりでは今川焼きというのがポピュラーだ」
やいのやいのとくだらない言い争いをしていた最上と霊幻を見て、最上の母親はくすくす笑う。
「あなたたち、本当に仲良しね」

（そうだった。私と霊幻は霊能事務所を共同経営していたんだった）

だから。

「だめだ、最上……！！こんな仕事は金にはなっても何もいいことは無い！！やめておいた方がいい！！」
「でも、治療費が必要なんだ……！！」
霊幻は最上が呪殺の仕事を受けるのを最後まで反対していたし、

「最上の馬鹿野郎……！！」

自殺した最上の死体のそばで、ずっと泣いていてくれた。

（霊幻は、私の、私の──？）

がっ、と最上は泣きじゃくる霊幻の首を掴む。
「お前、何をした！」
「最上……！！」
霊幻は腕を最上の首に絡ませ、目を閉じて口付けを迫る。
「ん、っ……！」
最上は思わずその口付けに応えた。
霊幻をかきいだいて、柔らかい舌をむさぼるうちに、ふと霊幻の着物が変わっている事に気が付く。
前の裾は短く、後ろは金魚の尻尾のように長い、ひらひらとしたどこかエロちっくな真っ赤な浴衣だった。
「気が付いたか？アンタは逆に霊幻に精神世界に侵入されたんだよ。もっとも、霊幻の無意識下に、だけどな」
おでこをつけて、息のかかるような距離で霊幻が語る。
「その中でアンタはアンタの都合のいいように霊幻を変えた。どうだった？自分の望みに触れた気分は？」
最悪に──最高の気分だった。
「感謝する。自分の望みを正しく知っておくことは大事だからな」

「ァ、んっ」
自分の人生に霊幻がいてくれたなら。無意識に最上はそう思っていたのだ。
何か違ったのではないか、と。
「言うことはストイックだけど、やってることはふしだらだなぁ……あ！」
最上は自分が作り出した幻の霊幻の身体をまさぐり、押し倒し、その性器を膝でグリッとこねた。
「こういう機会に発散させておかないとな……」
「ふふ……優しくしてくれよ？」
赤い浴衣をはだけさせ、胸をまさぐって悶えさせる。
「あ、あ……最上のえっち……」
「そうだが、それが何か？」
最上の手が脇腹を撫ぜ、太ももを撫であげる度に霊幻は身体を跳ねさせるが、その度にぴちゃん、ぽちゃんと水音が不思議と響くのだった。
（俺は霊幻新隆を、刑務所に閉じ込められた金魚のようにでも思っていたのか）
最上は霊幻の淡い色をした乳首を口に含む。
「ぁああっ！」
カリ、と上の歯で弾いて、霊幻を跳ねさせた。
「ね、もう、挿れて……？」
霊幻が腰をくねらせて、真っ暗な世界に赤い金魚の尻尾をたなびかせる。
「……ああ」
果たして童貞卒業が幻想世界で良いものか、と最上が少し躊躇った瞬間。
バツン、と接続が切られる感覚がした。

「なっっっっっにやってんだよ、最上さん！！」

そこはいつもの霊幻の真っ白な精神世界だった。
そこで真っ赤な顔をしたグレースーツの霊幻が肩を怒らせている。

「記憶があるのか」
「残念なことにな！意識は浮上出来なかったけどな、全部覚えてっからな！！」
どこか嬉しく思いながら、くっ、と最上は笑う。
「私のセックスはどうだったかね？なにぶん経験が無いものでね。上手くできていたかい？」
「〜〜〜〜っ知るか！！！！」
真っ赤になった霊幻に、最上は大笑いをした。

最上は気づいて居なかった。

『愛』と書かれた南京錠に、ヒビが入ったことに。

続